

# 7月号 School Aid Japan

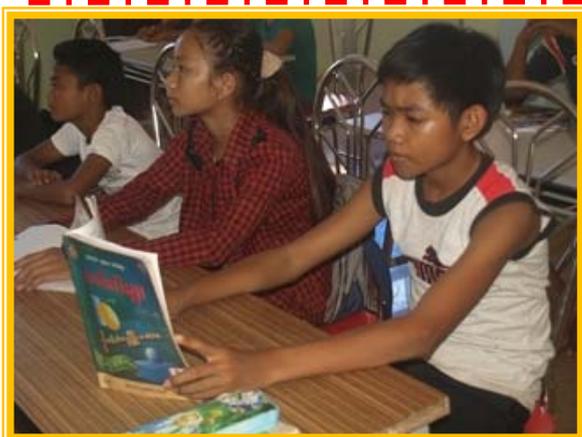
スクール・エイド・ジャパン

## Dream通信

2013. 7. No. 64



### 子どもたちの成長のために ～勤勉・勤労・思いやり～



教科書をよく読み、理解を深める



学年の中でお互いにフォローしあう



保母さんに教えてもらう小学2年生

皆さん、こんにちは。日本では長かった梅雨もそろそろ明け、本格的な夏に入ろうかという時期でしょうか。ここカンボジアは本格的な雨季に入り、連日スコールが続いています。

さて、今回のDream通信では、子どもたちの教育において、園で決めている3つの柱「勤勉」「勤労」「思いやり」をテーマにしてお伝えします。

#### 勤勉・継続すること

カンボジアの学校は二期制で、10月から2月が前期、3月から7月が後期です。今はちょうど後期の期末試験前とあって、子どもたちは少しでも良い成績を取るために、一所懸命勉強に励んでいます。

小学生は、毎日午前・午後ともに学校の授業と園での補習を受け、夜には部屋で保母さんに勉強を教してもらっています。中学生は、学校での授業と園での補習はもちろん、夜には教室で学年ごとに自習を行い、授業に追いついていない子のフォローをしています。そして夜9時の消灯後も、パナソニック株式会社様からいただいたソーラーランタンを使って勉強を続けています。高校生は園での補習は受けていません。その代わり、学校の先生が行っている塾に通い、毎日12時間以上勉強しています。塾に通うには、園での補習よりも多くの金額がかかります。高校生には、そのことを口酸っぱく何度も伝え、少しも無駄にすることのないよう必死に勉強することを教えています。

今年の10月には、2008年の開園以来、初めての大学生が誕生する予定です。受験生である高校3年生のナウ・スレイノイは、毎日14時間以上を勉強に費やしています。スレイノイは入園当時、すでに中学生でした。皆よりスタートが遅れたことにより、勉強しても勉強しても皆に追いつけず、随分苦労しました。しかし毎日12時間以上勉強し、その努力を継続することで、今は毎月クラスで1番の成績を取っています。試験前の一時の努力ではなく、日々継続して努力する、その姿を模範として、園の後輩たちが後に続き、地道な努力のできる大人となってくれることを、切に願っています。



大きく実ったナス



とうもろこしはまだ時間がかかりそう



子どもたちの作った野菜が食卓に



食事の時間は一番幸せな時間

## 勤労・生きる力

今月に入ってようやく本格的な雨季が訪れ、また、2ヶ月前から取り組んできた肥料作りの効果もあって、裏農園で育てている野菜は急激に生長しています。前回の種蒔きで植えたトマトやナス、空芯菜などの野菜はすでに幾度かの収穫を終え、また、4月末に植えたばかりの落花生も、ようやく第1回目の収穫を迎えることが出来ました。今後はトウモロコシやオクラなどの野菜をはじめ、スイカやメロンなどの果物も収穫期に入るため、子どもたちも非常に楽しみで仕方ない、という表情を浮かべています。また、職員用の農地には新たにパパイアの種を植え、2週間以上が経過してようやく芽が出てきました。

今後は、グループリーダーの子どもたちに各グループの作付け計画を作らせ、それに基づいた収穫量の予測を立てるなど、計画作成から実行、目標設定や達成するための道筋を考えるなどといったことにも挑戦していきたいと思います。また、職員用農地では果樹などを含める長期的な輪作計画を立てていきたいと思っています。

まだまだ失業率の高いカンボジアで、園の子どもたちが生き抜いていくためには、自立して生きていける、たくましい大人に成長していかなければなりません。子どもたちには「将来自身自身の力で生きていくために、日々の農作業に真剣に取り組むこと」を教えています。

## 思いやり・感謝の心

裏農園で獲れたキュウリ、ナス、トマト、ササゲ、空芯菜などの野菜は週に2、3回、食卓に並んでいます。また、先日ようやく第1回目の収穫を終えたばかりの落花生も、早速茹でられ、夕食の食卓に並びました。子どもたち自らが土を耕し、種を蒔き、肥料を作り、雑草を取り、虫を取り、そして自分たちで収穫した野菜や果物の味は、やはり格別の味であり、市場で買ってくるものとは比べ物にならないほど美味しく感じられる様です。

園の子どもたちにとって、食事の時間は特別な時間です。今では当たり前のように一日にご飯を3回食べられる様になっていますが、園に来るまでは、毎日ご飯が食べられる、それは決して当たり前のことではありませんでした。だからこそ、園の子どもたちには、園に入る前の暮らしを決して忘れて欲しくありません。決して毎日ご飯が食べられることを当たり前前に思って欲しくありません。私たち人間は、植物や動物の命を頂いて生きている。これからも、そのひとつひとつの命のありがたみを理解し、その命を頂くことに感謝のできる子どもたちに育って欲しいと心から願っております。